平成１８年(昭和８１年)７月４日（火）

東海の古代

第　７４号　編集・発行　古田史学の会・東海

代表 林 俊彦 〒461-0025 名古屋市東区徳川 1-729
メール frttokai@zm.commufa.jp
電話/FAX(カラー可) 052(936)5012
郵便振替 00870-5-30752

「浮石部」考

大野城遺跡から出土した木柱に刻まれた「浮石部」の文字。その解釈をめぐって前号では韓国の「浮石寺」を紹介しました。国内史料では「浮石」そのものは見つかりませんが、日本書紀の以下の記事が眼にとまりました。

一に云はく、無目堅間を以て浮木に為りて、細縄を以て火火出見尊を繋ひ著けまつりて沈む。所謂堅間は、是今の竹の籠なりといふ。

ニニギの息子、ホホデミ（山幸彦）が海神の宮に向かう場面です。「浮木(ｳｹｷﾞ)」という言葉が出てきます。岩波古典文学大系本の注によれば、「水の上に浮かぶ木、いかだの類」とあります。ふと阿蘇ピンク石を想起しました。わざわざ九州から関西まで運ばれ、古墳の石棺に使われたこの石も浮木で移動したことでしょう。石自体も「浮石」と呼ばれたかもしれません。

ひょっとしたら、こうした石（岩）の加工や運搬を特技とした技術者集団がいて、それを「浮石部」と呼び、広く大野城などの築造にも使役されていたのではないでしょうか。

古事記の古地図

私は「呪符の証言」と題して、ヤマタノオロチの実態を考察し、高志の地名の読みに異議をとなえました。

我が女は、本より八稚女ありしを、この高志の八俣の大蛇、年毎に来て喫へり。今そが来べき時なり。故、泣く。（古事記）

「高志」をなぜか全ての学者・専門家がコシと読み、越の国と結び付けます。しかし「高」の文字はタカと訓読みするか、コウと長音で音読みするかしかできないはずです。コと短音で読める根拠はありません。高御産巣日神、高天の原、阿遲鉏高日子根神、高千穂の峰、高倉下、古事記ではいずれも高をタカと読んでいるではありませんか。何としても高志をコシと読みたい、その無理がニニギ等の正式名称の一部、日高日子をヒコヒコと読む更なる無理を励起しています。史料事実を謙虚に受け止める姿勢が欠如しています。佐賀県には高志神社も矢俣神社もありました。

故、この人その鵠を追ひ尋ねて、木國より針間國に到り、また追ひて稲羽國に越え、すなはち旦波國、多遲麻國に到り、東の方に追ひ廻りて、近つ淡海國に到り、すなはち三野國に越え、尾張國より傳ひて科野國に追ひ、遂に高志國に追ひ到りて、和那美の水門に網を張りて、その鳥を取りて持ち上りて献りき。（垂仁記）

沙本毘賣命の遺児、本牟智和気王をめぐる逸話の一場面ですが、この鳥の飛行経路を地図に再現してみてください。これだけ広大な地域を自在に飛び回れるのはラドンかモスラぐらいでしょう。こんな鳥は実在しません。鳥類は気ままに大空を放浪しているように見えても、日々のエサを求め、生活圏を維持するために、無用な長距離回遊はしません。またこれを追尾できる超能力を持った人間も存在しえません。

古代人は荒唐無稽な話に酔いしれる愚者の集団ではありません。実態はごく狭い地域を指すでしょう。わたしたちは古事記と地図を共有していないようです。

この八千矛神、高志國の沼河比賣を婚はむとして、幸行でましし時、その沼河比賣の家に到りて、歌ひたまひしく、八千矛の神の命は　八島國　妻枕きかねて　遠遠し　高志の國に　賢し女を　ありと聞かして……（神代記）

高志と沼河の二つがセットになっていることを記憶しておいてください。

またこの御世に、大毘古命をば高志道に遣はし、

その子建沼河別命をば、東の方十二道に遣はして、その伏はぬ人等を和平さしめたまひき。……故、大毘古命は、先の命の随に、高志國に罷り行きき。ここに東の方より遣はさえし建沼河別命と、その父大毘古と共に、相津に往き遇ひき。故、其地を相津と謂ふなり。（崇神記）

ここにも高志と沼河があります。また、この行路も不思議です。「東方十二道」を普通に解すれば、この親子が帰路で出会うはずがありません。

そして相津を会津と同じとするのも根拠がありません。古田先生が「盗まれた神話」で示した地名表記のルールに従えば「陸奥の会津」とか二段表記以上にすべきです。小原庄助さんも白虎隊も古代には存在していませんでした。古代の誰がアイヅと言われて福島県方面を向くでしょうか。「相津」は高志にもあったようです。

なお垂仁記に「尾張の相津」が登場しますが、通説はこの相津の所在もつかめていません。

長崎県に島原半島があり、その北端に愛津があります。

９月例会で古事記の古地図を探索しませんか。

９月例会に参加を

日程：９月１０日（日）午後１時半～５時

場所：名古屋市市政資料館第１集会室（２階）

名古屋市東区白壁１の３（名古屋拘置所南）

地下鉄名城線「市役所」下車、東へ徒歩８分

名鉄瀬戸線「東大手」下車、南へ徒歩５分

市バス「市政資料館南」下車、北へ徒歩５分

〃　「清水口」下車、南西へ徒歩８分

〃　「市役所」下車、東へ徒歩８分

一応、駐車場有（無料）１２台収容

南隣にウィルあいち（愛知県女性総合センター）／地下駐車場３０分１７０円

参加費：500 円（維持会員は無料）

今後の予定

１０月例会：１０月８日（日）（会場未定）

例会はなるべく毎月第２日曜日に固定したいので会場をしばしば変更することになりました。よく確認してからお出かけください。

古田先生とその学問に興味のある方ならどなたの参加も歓迎します。また参加に際し事前連絡は不要です。遅刻早退もかまいません。

八十神の末裔？

軍尼、一百二十人有り。猶中国の牧宰のごとし。八十戸に、一伊尼翼を置く。今の里長の如きなり。十伊尼翼、一軍尼に属す。

「隋書」イ妥国伝のこの一節。以前に瀬戸の林さんが発見され、伊尼翼の語は伊尼と翼の二つに分かれる、「翼」は補佐を示す、という説が生まれました。

東海の会では、もう一つ疑問が生まれています。中川区の竹口さんが気づかれたのですが、日本の律令制では「五十戸をもって一里となす」のはずです。この「八十戸に、一伊尼翼を置く。今の里長の如きなり」の八十戸は何を基準にしているのでしょう。

古田先生が、熊襲、木曾、阿蘇などの語からソの神様が日本の古層の神々として指摘されました。古賀達也さんが、最近、八十神に注目されています。大国主と争った兄弟神・八十神です。しかし古事記には様々にヤソが登場します。

八十禍津日神(神代記)、土雲八十建、八十膳夫(神武記)、特に次の記事が注目されます。

ここに天皇、天の下の氏氏名名の人等の氏姓の忤ひ過てるを愁ひたまひて、味白檮の言八十禍津日の前に、探湯瓮を居ゑて、天の下の八十友緒の氏姓を定めたまひき。（允恭記）

八十が単に語調を整えるために使われているのか、ある種の聖なる数なのか、社会組織の意味ある単位なのか、日本書紀の例もこれから探して考えてみます。